東亜大学総合人間・文化学部公開講座「千夜一夜」要旨

第二部　悪への挑戦

第5話　「祟り神」と「悪」

上　原　雅　文（人間学研究室）

仏教移入以前の日本において、神とは自然災害や疫病などの災厄をもたらす荒々しい威力であった。神の「祟り」とは通常災いを意味するが、語源的には神の「立ち現れ」の意であり、祟りをなす荒々しい威力を神の本質と見なしていたのである。しかし、「祟り神」の威力は生命の根源でもあり、存在を豊かに生成させる自然の不可思議な威力でもある。すなわち神は善悪において両義的である。人々が行う神の祭祀とは、神を迎えてもてなし和めることによって、その威力を五穀豊饒・天下太平などをもたらす威力へと転化させようとする行為であった。このような信仰土壌の日本に、6世紀、仏教が伝来した。仏教は衆生（生きもの）を苦悩する存在として捉え、衆生個々の内面的な煩悩（無知、愛欲、怒りなど）を苦悩の原因とする。そして衆生に対して、存在の真実を知ることによって煩悩を克服し、仏という絶対的な幸福を目指すべきであると説く。8世紀に「苦しむ神」が登場する。すなわち神が、神身に転生して苦しんでいるので仏法によって救ってほしいと託宣するのである。人々は、日本の神々を衆生の1つと見なし、祟りの根源に神の煩悩を見いだすようになった。そして従来の祭祀に加えて神に読経などの法会を行うことで、神に仏知を伝えて神の苦悩を和らげる祭祀儀礼が生じた。その後9世紀頃に「御霊信仰」が成立する。災害を、恨みを抱いて死んだ人間の霊魂の祟りと見なし、祟り神と見なされた霊魂を祭ることで霊魂を鎮め、豊饒をもたらす神へと転化させようとする信仰である。人々は祭祀によって、霊魂の怒りをなだめつつ、仏法の知によって、祟り神となった霊魂を善へと方向づけようとした。この信仰は、「苦しむ神」の概念を媒介にして生じたと見ることができる。

ここで、新たな善悪観が成立した。すなわち、人間における煩悩という根源的な悪（怒り・愛欲）を断罪し消滅させるのではなく、祟りを想定したように霊魂の抱く願望を一時的には満たさせようとする。そしてそのことによって霊魂を鎮めて和らげ、同時に知によってその悪を自覚させ、自覚させることで悪の力を善へと転化させるという善悪観である。

このような善悪観は、祟り神信仰の土壌に仏教が移入されたことで成立したのであるが、儒学や国学、近代思想においても、根強く繰り返し登場しているのである。

第6話　犯罪に挑む心理学

——犯罪の現場から——

平　　伸　二（人間学研究室）

犯罪心理学が大変な人気である。これは神戸児童連続殺傷事件や地下鉄サリン事件などの凶悪犯罪、あるいは、児童虐待、ストーカーなどの生活に密着した犯罪の急増が、犯罪者の心理を知りたいという人々の好奇心を喚起した結果と考えられる。

特異な犯罪が起こった場合、人々は一言で納得できる原因を知りたがる。これは原因がわかれば、新たな犯罪を予期することができ（予期